

ソフトで作成し、原寸大でレイアウトを調節して最終的な出力はカラープリンタで行いました。それぞれは、大きな模造紙ではなく A4 のコート紙各12枚を、ずれないように注意して貼り合わせたものです。このような方法は、画面上で試行錯誤できることで大いに労力の節約になった反面、制作にはかえって手間がかかったような気もします。背景は白に、図表はなるべくシンプルな配色にすることで、強調したい部分を明確にするというのを基本方針にしました。視覚的に理解されるよう図表は多用しましたが、口頭説明がなくても一通り理解できる程度の説明文は確保しました。

私の場合、見た目よりも発表内容の方に注意する必要が大きかったです。植物生態学的な興味に重点を置くと、敬遠されてしまうおそれがありましたので、気象学関係の人が何を知りたそうか、どんな図を見たいのかにかなり気を使いました。それで、陸上生態系が CO<sub>2</sub> 濃度上昇や気候変動に与えるフィードバックについて強調することにしたわけです。いささか趣が異なる研究なものにもかかわらず、多くの方に質問やコメントを寄せていただき、気象学会の懐の深さを感じ入りました。振り返って他の方々の発表をみれば、内容

的に高度なことはもちろん、コンピュータの画面上でデモンストレーションを行ったり、随所に工夫がみられる発表も多々ありました。特に、鮮やかなカラーの図は多くのポスターで使われていました。それだけに、賞に推されたことも半信半疑でしたが、3日間展示されるだけでも得たような気分でした。少なくとも、生態学の分野でも気象学方面の方々と接点を持ちうる研究が行われていることを知らせる、という当初の目的は達せられたように感じられました。

今回が初めての気象学会への参加だったもので、「新方式」を採用して一般講演が全てポスターで行われたと言われても、是非を論じることはできません。が、少なくとも私のような気象学以外の分野からの参加者にとっては、一方通行で終わりがちな口頭発表よりは、議論を通じて接点を探ることができるポスター発表の方がより手応えが実感できて効果的な気がしました。最後に、大会運営にあられた気象学会関係者各位には深甚なる謝意を表します。今後も生物圏と大気圏との間の相互作用に関する研究の発表が、気象学会で盛んに行われることを期待しています。

(筑波大学生物科学研究科生物学専攻 伊藤昭彦)

## 第20回極域気水圏シンポジウムのお知らせ

「氷床ドーム深層掘削観測計画」がほぼ終了し2500 m の氷床コアの分析が国内で既に開始されています。また第38次南極地域観測隊からはプロジェクト研究観測として「極域大気-雪氷-海洋圏における環境変動機構に関する研究」が開始されました。さらに長期的視点での観測としてモニタリング研究観測が開始されています。同時に北極域ではスバルバル、グリーンランド等多地域において、地球科学に関する様々な観測が実施されております。一方国内においては、これらから得られた試資料、衛星データなどの解析が実施されております。

南北両極域、またそれらと関係する諸領域を、主な研究対象とした大気科学、雪氷科学、海洋科学等に関する研究成果、研究展望などを論議するシンポジウム

を下記の日程で開催いたします。ふるってご参加ください。なお、これまで、申込みと予稿原稿の締め切り日をずらしていましたが、今回はこれを同じ日程といたします。

### 記

日 時：平成9年11月26日(水)～27日(木)

会 場：国立極地研究所 講堂

原稿締切：平成9年9月末日(A4用紙2枚以内)

連絡先：国立極地研究所 気水圏シンポジウム係

和田 誠

〒173 東京都板橋区加賀1-9-10

TEL：03-3962-5580

FAX：03-3962-5719

E-mail：wada@nipr.ac.jp